

理事に就任して

基礎地盤コンサルタンツ（株）東北支社長
仲井 勇夫



はじめに

平成29年4月に新田洋一の後任として、東北地質調査業協会の理事に就任いたしました基礎地盤コンサルタンツ株式会社東北支社の仲井です。

復興期間も後半戦となり、ようやく東北地方にやってまいりました。まだまだ残された課題はあると聞いています。協会活動をとおして地域貢献に取り組んで参りますのでよろしくお祈りします。

これまでのこと

江戸幕府を開いた徳川家康の生誕地である愛知県岡崎市で、ひのえうまの年に生まれ、東海道五十三次の39番目の宿場町である池鯉鮒（知立市）で育ちました。

高校の同級生と西三河の猿投山に登った際に、山頂で小さな宝石のような小石を見つけ、なんとなく自然科学に興味を持ち、その分野に進学することになりました。当時は、それが花崗岩中のペグマタイトに含まれる自形の水晶とは知りませんでした。



図1 池鯉鮒 (Wikipediaより)

就職活動はバブル全盛期でした。教授からいただいた数種類の企業パンフレットの中から、表紙のデザインが気に入った会社を選び、教授に1本電話をかけていただくとあっという間に今の会社に内定が決まりました。残りの時間は、卒論

の山歩きとアルバイトで過ごしました。

地質調査の仕事

就職して初の勤務地は中部地方でした。地熱、中央新幹線、第二東名自動車道、伊勢湾口道路、地すべり、災害対応、万博関連など、生まれ育った地域で淡々と業務をこなす日々が続きました。

業務で印象的だったことは、万博予定地での調査です。建設反対派との毎日の攻防戦で消耗する日々を過ごしました。山中で音を立てずに電気探査を実施するのは、反対派に見つかり、すぐさま電極を抜かれてしまうからです。公安警察もいたようでしたが、あてにはなりません。それでも事情聴取だけはしっかりとされました。

中央新幹線の調査では、関係者ということで実験線に試乗したことが思い出されます。時速500キロの世界は、例えるなら、飛行機の離着陸の緊張感がしばらく続く感じでした。



図2 実験線の乗車証明書

仕事道具

地質屋のメインアイテムであるクリノメーターの紹介です。これは20年以上前にドイツから取り寄せたもので、フック・ブレイの岩盤斜面工学に掲載されているものと同じです。日本で手に入るものと

比べて、少々、凝った機能がついています。①偏角補正：測定場所に応じて任意の偏角補正ができますので、読み値がそのまま使えます。②機械式ダンパー：メカニカルなダンパーによって速やかに針の動きが収束し、測定値を保持できます。③ワンアクション：走向板を測定面に合わせ、水平をとると一度で走向傾斜の測定ができます。④水準器の鏡：オーバーハングした緩い角度の測定面もこの鏡を使って、裏側から水準器を確認しながら走向板を測定面に合わせ、走向と傾斜を保持し、手元に戻した後で読み取りできます。360度表示なので、日本の走向傾斜表示用にシールを貼っています。

最近では、スマホのアプリで一度に地図表示までできてしまうクリノメーターが登場していますが、愛着のあるものは手放せないものです。

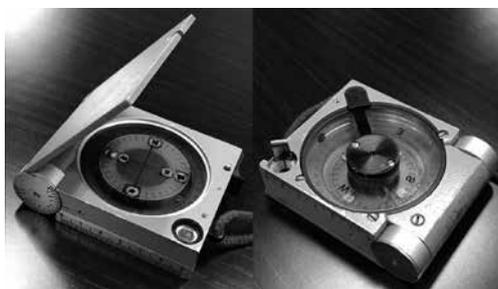


図3 私のクリノメーター

アウトリーチ

業務の合間をぬって応用地質学会の幹事を務めさせていただきました。学会活動では、小学生を対象とした親子体験教室などを開催し、河原での化石発掘や都会のビルの石材観察などを行いました。この年頃の子供たちは感受性が高く、自然科学という分野に自然に興味をもつようです。現在、縁あって大学で教えることになり、受験勉強を経て、すっかり自然科学とは縁遠くなった学生を相手にしています。この分野が受験科目として乏しいことが、地質リスクに対する社会認識を遅らせている一因かも知れません。



写真1 化石探し(親子体験教室)

東北に来てからのこと

本社勤務、関東支社勤務を経て、平成28年10月に東北支社に移動となりました。東北地方は、全く初めての勤務先であり、アウェイ感を持ちながらの転勤でした。職場の人たちは、とてもシャイで、言葉少なく、イメージ通りの東北の人と感じましたが、それは最初の印象であり、内面はとても頑固でおせっかいな人もいることが徐々に分かりました。当たり前の話です。

業務内容は、やはり震災関連が多く、新エネルギーや発注者支援業務などが多いのが特徴です。東北地方は、まさに課題先進地であり、東北地方での成果が、今後、日本全体が直面する様々な問題解決の糸口になると感じます。

おわりに

平成29年10月に地質リスク学会主催の「地質リスク海外調査ミッション」に参加しました。ロンドンに本社を置く巨大コンサルタント企業を訪問し、地質専門家をプロジェクトの上流部に配置した地質リスクマネジメントの状況を視察しました。

現在の日本が直面する維持管理や人手不足問題、協会の取り組みである地質リスクについて有効な手法がいくつかあり、日本にあった形で活用できるよう努力してゆきたいと思います。